

2017年6月11日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 使徒言行録2章43節～47節

02:43 すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業と行われ
ていたのである。02:44 信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、02:45 財産
や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。02:46 そして、毎日
ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって
一緒に食事をし、02:47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、
主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

説教『すべての人に畏れが生じた』

◆今日の箇所の小見出しに「信者の生活」とありますが、私は今回、「神の国の到来」とす
るのが良いと思いました。ここに、私達が繰り返し、主の祈りにおいて「御国を来させた
まえ」と祈っている事の実現の様を見る思いがしました。主イエス・キリストの宣教の第
一声はマルコによる福音書の1章15節にこうあります。「時は満ち、神の国は近づいた。
悔い改めて福音を信じなさい」と。正に、この第一声が、今日の箇所において実現してい
るのを見るのであります。

◆以前にも話したことがあります、聖書を読んで分からない箇所があれば、聖書の他の
箇所を読んでみる。そうすると、分らなかった箇所が分るようになる事があります。そう
いう経験を皆さんもされていると思います。聖書はこれだけ大部の書物です。実に多様な
事が書かれております。何度読んでもよく分らない箇所もあります。そのような時、今日
の箇所と合わせて読むのがよいと思います。

◆古来「グレート・テキスト」と呼ばれる聖書の箇所があります。偉大な箇所という意味
で、“これが聖書が伝える事柄の核心”と言える聖書の箇所のことです。例えば、ルターが
「小福音」と呼んだヨハネ伝3章16節がそうです。バルトが「聖書の光源」と呼んだコリ
ント前書15章「復活の章」がそうです。詩編第23篇や、詩編中最も短い117篇なども「グ
レート・テキスト」です。私の愛唱聖句ロマ書8章31節～39節も「グレート・テキスト」
です。今日の箇所には教会の原像が描かれています。今日の箇所は正に「グレート・テキ
スト」です。信仰に生きるとはどういうことか。信じるとはどういうことか。教会生活は
如何にあるべきか。伝道は如何になされるべきか。平和を造り出すにはどうすればよいか
等々、私たちが繰り返し立ち返り、聞くべき「グレート・テキスト」です。

◆43節にこうあります。「すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な
業と行われれていた」と。ここに「すべての人に恐れが生じた」とありますが、こ
の「恐れ」はこの字ではなく、畏敬の「畏」を当てるべきだと繰り返し申してきました。
この「畏れ」は何者にも代えがたい神様に対する畏れです。私達が人生において経験する
ありとあらゆる恐れを克服させてくれるところの「畏れ」、それが神様への畏れです。一切
の恐れ、恐怖から私たちを解放してくれるところの畏れ、それが神様に対する感謝を伴っ
た畏れです。しかもこれも繰り返しになりますが、「すべての人に」は誤訳ではありません
が、「魂」とか「靈魂」と訳されるべき言葉で、口語訳では、「みんなの者におそれの念が

生じ、多くの奇跡とするしとが、使徒たちによって次々に行われた」となっていますが、この方が原意をよりよく良く伝えているように思います。

◆「次々に」というのも意識です。「畏れが生じました。そしてその畏れはずっと続きました」という表現です。そしてまた使徒たちが奇跡を、イエス様が生前なさった数々の不思議の業、癒しの業、しるしと奇跡が、使徒たちを通して行われ、これも持続し絶えなかったという表現です。畏れの持続と奇跡の持続。口語訳では「多くの奇跡とするしとが、使徒たちによって次々に行われた」となっています。今日の箇所は短い箇所ですが、ここに出てくる動詞はすべて、持続を表わす現在形です。「神様への畏れが生じ、それが持続し、使徒達による奇跡とするしも絶えませんでした。」今日の箇所のすべての動詞がそういう表現なのです。教会とはそういうものだということです。一時の感激とか感動、勿論それがなければ、私たちは信仰に入ることにはないのですが、時に「昔の感激を忘れて」と言ったりしますが、それは、根源的な大事な事柄、畏れの喪失を表しています。

◆しかし最初の教会はそうではなかった。本当に神様を畏れました。そしてそれが持続したのです。その「畏れ」の様子は、47 節にこうあります。「喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していた」と。この「畏れ」は神様を賛美する事と一つである所の畏れなのです。感謝に満ちた畏れなのです。その中に生きるのが信仰者であって、その群れが教会なのだということをこの箇所は語っています。先程、「全ての魂に畏れが生じた」と訳すべきだと申しましたが、この「魂」とか「靈魂」と訳されるべき言葉は、実は「呼吸する」という言葉の派生語です。ですからこれは信徒の日々の息づかいなのです。私がいつも使っていますギリシャ語の辞典はこういう説明を加えています。(神の助けにより永遠の命を生きることができる人間のいのちの最も尊いものとしての)「魂」。(体は死んでも失せない)「靈魂」。そのような命を賜る神に対する「畏れと賛美と感謝」が持続したのです。それが43 節で語られていることです。

◆43 節の後半に「使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていた」とあります。これは生前の主イエス様がなさった奇跡と不思議な業が弟子たちを通して行われたということですが、今日の箇所の最後の47 節にこうあります。「信者たちはみな一つになって、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」と。「弟子たちを一つになさっているのは、主イエス・キリストです」と言っているのです。生前、主御自身がなさった御業を、今、弟子たちと共にいて、弟子達の中で「霊」として「魂」として生きて働いておられる御霊なるイエス様が、今もその御業をなさっておられるということです。そうこの聖書は語っているのです。ですからこのイエス様を主と信じる私たち一人一人の中に主イエス・キリストは、正に聖霊として生きて働かれ、御自身の命を私たちの中で生きておられるのです。

◆あのボンヘッファーは、「キリストは教会として現臨しておられます」と表現しました。これは神学の言葉であると同時に、正にイエス様は教会として、私たちと共にいて、私たちの中に現臨して働いておられるという事を言っているのです。彼は39 歳の若さで1945 年にヒットラーが自殺する直前に処刑されますが、長く死刑囚の最後を看取ってきた医師が証言しています。「ボンヘッファーは獄中であってまるで王様のようにであった。このよう

に獄中生活を、そして最後を迎えた人を私は知りません」と。神様に対する畏れと賛美と感謝、それは獄であろうが、どこであろうが、主は我が内に生きておられる。私とイエス様とは一体なのだ。ですから、主イエスの御心は、今も私において果たされているという信仰と確信ですね。ですから神様を畏れ、主イエス様を信じる者には、この世のいかなる逆境も苦悩もあらゆる試練も、それは相対的なものであり、主を信じる者の魂を不自由することは絶対にできません。そういう生活を最初の弟子たちはしたのです。それがここに記されていることです。そしてこれがわたしたちにも賜っている恵みなのです。

◆今年の「聖霊降臨節」以来、「聖霊降臨とは神の全存在の施与、神の全賜物も施与」と繰り返し申して来ました。神様はその全存在と全賜物を私たちに施し与えて下さるのです。私たちにどうしても必要な物ならば必ず与えて下さいます。御子をさえ惜しまず賜った神様が、その他の私たちに必要なものを与えて下さらないはずはありません。聖霊降臨とはこのような「神様の全存在と全賜物の施与」の出来事なのです。この神様の限りない恵みは私たちが認識する前から、永遠の始めからそうなのです。しかし私たちの目がふさがれていてこの事実が見えなかったのです。この事実の認識は「啓示」による開眼以外にありません。過去には見えなかったわたしたちが、今は見える者とされたのです。

◆昨日も今日も明日も永久に、常にそうである神様の恵みの事実が目が開かれることは、「神様の自己啓示」による以外にありません。そしてこの啓示における神様が、聖霊なる神様なのです。そしてこの恵みの事実は、絶えることがありません。今日も礼拝の最初に読まれました詩篇第117篇は詩篇中で一番短い詩篇です。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまことはとこしえに私たちを超えて力強い。ハレルヤ。」これを私は先日の聖書を読む会で、「主の慈しみと真実とは、わたしたちの上に漲り溢れ、絶えることがない」と訳しました。これは詩編作者の賛美と感謝の歌です。この神様は常に私達と共にいまして、私達を助けて下さいます。

◆それで次を読みたいと思います。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、（というのは心と体と魂に関わる一切のものを、その喜びと悲しみにも共に与る。これが「共有する」ということです。これが「交わり」です。）持ち物や財産を売り、おのおのの必要に応じて皆がそれを分け合った」のです。これは普通したくてもできないことです。財産や持ち物を売り払い、ここに書かれているのは、しぶしぶとか、義務感でというのではなく、生ける主の御愛に促されて、持ち物や財産を売り払い、皆が必要に応じてそれに与ったのです。そして毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集ってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、「民衆全体」から好意を寄せられたのです。

◆ペトロの説教を聞いてその日に仲間に加わった人が三千人いたと、今日の直前に記されています。他にもペトロの説教に感動し、そして信者たちの生活に注目する人々は多くいたことでしょう。しかし、この仲間に加わることに躊躇した人も多くいたことでしょう。キリスト教は、その当時生れたての「異端」宗教です。そのような仲間に加わる事は単なる勇気ではできません。しかし民衆は、彼らの神を讃美しているその生活ぶりを見て、好意を寄せたのです。この「好意」という字は普通、神の「恵み」と訳される

ギリシャ語のカリスという言葉です。この新たに生まれた人々、教会の人々は全ての物を売って、必要に応じて分け合ったのですが、それでも不足していたのです。それを見ていた民衆が、「施し物」＝カリスをしてくれたのです。最初の教会は正にキリストの香りを放っていました。周りでそれを見ていた人たちは施さないでおれない気持ちになったのです。神様は、教会内部の不足を、周囲の一般の人々の好意によって支え給うたのです。こうして主は救われる人々を日々仲間に加え、一つにされたのです。

◆「今、平和を造り出すために、何をなすべきか」という事が私達の喫緊の、世界の課題です。このことについては先程触れました詩編 117 篇にこうありました。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ」と。これは神様を畏れ、信じる教会の呼びかけです。この呼びかけが本当にすべての国とすべての民に説得力があるかどうかは、呼びかける私達の生活と実存如何にかかっています。呼びかける私達が、今日の聖書の個所に記されている初代の信徒たちのように生きているならば、教会と一般の人々との境は壊れ、共に恵みに与る事ができるのです。そこに平和があります。このようにして主は救われる人々を日々仲間に加えてくださることでしょう。

◆これは星野富弘さんのカレンダーの絵です。この花は「ハナニラ」です。こういう言葉が書かれています。「この花は この草にしか 咲かないそうだ 私にしか できないことがあるのだ」。今日の聖書を読んでいますと、ここには色々な人がいます。財産を持っている人もいれば、無一物の難民もいる。けれども一人一人が自分にできる事、自分に与えられた賜物を生かして奉仕したのだと思います。誰一人として余計な人はいないし、何もできない人もいません。自分に出来ることをして、人に仕え、神様への感謝を表したのです。わたしたちは一つ体ですから、どの部分が痛んでも全身が痛むのです。これがわたしたちの交わりの実体だと思います。初代教会はそうだったのです。

◆小さい人は小さい人なりに、豊かな人は豊かな人なりに、神を畏れ、神に感謝しつつ、仕え合ったのです。そういう姿を見ていて惹かれない人はいません。実に私たち一人一人がイエス様にとってなくてはならない存在です。そしてその人にしかできない奉仕があるのです。それらがキリストによって一つにされる時、そこに香り立つ空気が漂うのではないのでしょうか。一切の隔ての壁を超えて、喜びと悲しみを共有する輪が広がっていくのではないのでしょうか。それが平和だと思います。私にしかできない奉仕があります。それらが主イエス様を中心にして一つになる時、広く世界に染み渡って行くのではないのでしょうか。そういう意味において、私たちのこの小さい教会の課題は実に大きいのであります。そして私たちの只中に主イエス様が生きて働かれ、全てを導いていて下さるこの事が私たちの教会です。このことを忘れないで、共に歩んでまいりましょう。

◆お祈りいたします。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。わたしたちはあなたの大きいなる、変わる事のない恵みと真実に与ってまいりました。今またそのことを新たに覚え、心から感謝いたします。どうか私たち、一人一人の歩みと、教会の歩みが、主イエス様によって祝され、本当に、世界のすべての国と人々の平和に資するものとならしめてください。この祈り、イエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。